

たかはまきよし
高浜虚子著「俳句はかく解しかく味う」ワイド版 岩波文庫 53、岩波書店 1991年6月26日刊を読む

1. な折りそと折りてくれけり園の梅 太祇

(1) 春先きになって、或る人の庭に梅の花の咲いているのを見て、彼処あすこにいい梅の花が咲いている、あの枝が一本欲しいものだと思うて、それをその家の人に断りことわもしないで折ろうとしていると、意外にもそこにその家の主人がいて、その梅を折ってはいけない、と叱りながらも、そんなに欲しいのならば上げようと言って、かえってその主人が手ずから梅の枝を折ってその人に呉れたというのである。

「な…そ」

「な」と「そ」の間に挟んだ動詞のはたらきを、頼む気持ちで抑制する意味を表す。どうか～してくれるな。

*小西甚一著「基本古語辞典」大修館書店 1966年3月刊より引用(林明夫)

(2) 同じ物を盗むのでありながらも、いわゆる風流泥坊で、その盗む者が花卉かきの中でも殊に清高な姿をして芳香を持った梅の花である事が、一種の面白味を持っている。またその梅を折る人も物を盗むは悪い事と知りながらそれを金に代えようというわけでもなく、多寡たかが梅の花の一枝位だから折ってやれと、窃ひそかに折り取ろうとしていると、思い懸けなくも其処そこに主人の声が出て梅の花を折ってはいかんと尤とがめられたので、吃驚びつくりして手を止めたのであるが、其処の主人もまた、それを尤めただけで無下むげに追い払うのも、それを折る人の心持を十分に解釈することの出来ぬものとして、何処どこかに自分自身不満足を感じるので、そんなに黙って折るのはいけないが、欲しいのならば上げようと言って、かえって手ずからその枝を無造作むぞうさに折ってその男にやったのである。

(3) かくしてその盗もうとした人も、それを尤めた人も、梅花そのものを通じて互にその心持を領解し合うところに、この小葛藤の大団円はあるのである。

2. (1) 俳諧の歴史というものは厳密に言えば殆んどまだ調べがつかないというてよい。芭蕉とか蕪村とかいう重おもな二、三の俳人については相当の研究をした人もあるけれども、俳句全体の歴史を文学史的に研究した人はまだ一人もないと言って差支ないのである。

(2)しかして世間で普通に説いている俳諧史は極めて簡略な極まりきった説話に過ぎん。今一層大胆に引つくるめて言えば、徳川初期から明治大正の今日に至るまで、多少の盛衰もあり多少の変化もあるにしたところで、要するに俳句は即ち芭蕉の文字であるといって差支ない事と考える。即ち松尾芭蕉なる者が出て、従来の俳句に一革命を企てた以来二百余年にわたる今日まで、数限りなく輩出するところの多くの俳人は、大概芭蕉のやった仕事を祖述しているに過ぎん。

(3)そこで今俳句を解釈するに当っても、元禄の俳句はこういう風に解釈せねばならぬが、天明の俳句はそれと全く違うてこういう風に解釈しなければならぬとか、明治大正の俳句はこういう風に解釈しなければならぬというような、そんな複雑した変化のあるものではなくって、或る俳句を抜き出して来て、一応それを解釈する事が出来るようになった以上は、大概の俳句はそれに準じてさほど困難を感じずに解釈の出来るものである。

(4)唯その中に読み込まれている材料の解釈がむつかしいがために、解釈が出来ぬというような場合は論外であるが、俳句なる或る特別の一つの詩形を解釈するだけの事は、若干句の解釈によって容易く領得せらるる事と考える。そこで私は殆んど時代なんかにとんちやくに数十句の解釈を試みて、諸君の俳句に対する解釈力というようなものを養うという事にしようと思う。

<コメント>

日本文学史上、芭蕉、蕪村、一茶、子規はじめ多くの俳人によって日本の文化として燦然と輝くに至った俳句。子規の弟子、高浜虚子によるこの俳句入門は日本人の必読書。

2019年1月23日(水)林明夫